

## ナップスターの成熟と喪失

高成田 享

多くのビジネスモデルがインターネットの新たな可能性を導き出してきたが、私にとっては、ナップスターほど衝撃を受けたものはない。インターネットは情報のあふれる海で、そこに接続するパソコンは、ネット上の情報の出し入れをする情報端末という道具だと思っていた。しかし、音楽ソフトを交換し合うナップスターの広がりによって、インターネットは個人のパソコンをデータベースの一部に変容させる力を持っていることに気づいた。

いま私のパソコンはナップスターに接続しているが、約1万のパソコンがここに接続し、お互いが持つ約220万の音楽データを交換できる状態になっている。そのなかには、著作権を犯しているものも数多くあり、米レコード協会（RIAA）が違法だとして差し止めを求めているのも、ビジネスの行動としては理解できる。しかし、繰り返すが、ナップスターの「本質」は、著作権に触れるソフトをただで交換し合う不法サイトにあるのではなく、個人のパソコンを巨大なデータベースにさせる可能性を示したことにある。

インターネットの進化をみると、いまは大容量のデータをインターネットで出し入れする「ブロードバンド」時代の黎明期にあり、通常の電話回線による情報の流通から、ケーブルやDSLなどにより容量の大きい情報の流通が急速に広がっている。いずれ、光ファイバーや無線などによる大容量時代を迎えるのは確実だ。そういう時代になれば、パソコンとインターネットは常に接続している状態になり、それぞれのパソコンにある音楽ファイル、映画ファイル、論文ファイルなどをデータベースとして活用する時代になる。ナップスターは、そういう時代が求めるビジネスモデルの先駆者ということに

なる。

しかし、RIAAがナップスターを訴えた裁判の経過によって、ナップスターは新しい時代の「先駆者」ではあるものの、「支配者」にはならないことがはっきりしてきた。裁判のなかで、その技術は評価されるものの、著作権というハードルを乗り越えるのが難しいという評価が定着してきたからだ。

当時大学生だったショーン・ファニングらが作ったナップスターが登場したのは1999年5月のこと。若い世代を中心に急速にユーザーがふえているのに驚いたRIAAがナップスターを著作権の侵害で連邦地裁に訴えたのはその年の12月。翌2000年5月に連邦地裁は、RIAAの言い分を認める判決を下し、さらに、同地裁はナップスターの停止を命じる仮処分を決定した。之に対して、ナップスター側は控訴していたが、今年2月12日に連邦高裁は、「前面中心」は範囲が広すぎるとして、地裁に差し戻しの決定を下したが、ナップスターのサービスがレコードの著作権を侵害しているとの基本的な認識は変更しなかった。

ナップスターの弁護士のひとり、デビッド・ボイズ氏は、ブッシュ大統領とゴア前副大統領が昨年11月の大統領選で、フロリダ州の票をめぐって争った「フロリダ戦争」のときに、ゴア側の弁護人として活躍、最後は最高裁で、「再集計」を求める熱弁をふるった人物だ。

その辣腕弁護士をもってしても、著作権の壁は崩せなかったということになる。いま、ナップスター側が求めているのは、これまで無料だったナップスターを有料に切り替え、その料金の一部をレコード会社に支払うという妥協案だ。

ナップスターは昨年10月、ドイツの大手メディア企業で、BMGブランドのレコードを持つベルテルスマンと提携し、ゲリラ的な存在からビジネス企業への転換をはかっていた。

いまのところレコード会社は乗り気ではないといわれているが、ナップスターによって、本当にレコードの売り上げが減っているかどうかは疑問で、いま5年間で10億ドルというナップスター側からの提案に上乘せがあれば、和解する可能性もある。ナップスターのユーザーの多くは、ある程度なら料金も支払うとみられるが、補償金が高くなればなるほど、料金も高くなり、客も逃げるわけで、ナップスター、レコード会社、ユーザーの3者がつくる均衡点がいくらなのかをめぐって、今後もさまざまなかけひきが予想される。

ナップスターが最終的に、レコード会社の和解し、ビジネスとし成功する可能性は残されているが、そうなると、ナップスターの潜在的な可能性は矮小化された感じがする。とくに、ナップスターが与えたもうひとつの衝撃度は、急速に弱るだろう。

それは、「情報はただ(フリー)をめざす」というインターネットについて回るテーゼである。インターネットをビジネスにしようとする流れとは別に、インターネットは本来、自由な情報交換の場で、そこからお金を稼ぐのは邪道であるという「ドット・コミュニズム」の信奉者がインターネットの世界には多い。かれらを勇気付ける旗手がナップスターだったのだが、独ベルテルスマンとの提携、さらに有料化の模索で、アナーキーなヒーローではなくなった。

これを成熟とみることはできるが、喪失した「革命精神」は、有料化ともあわせて、ユーザーのなかからナップスター離れする人たちも多くなることになるだろう。

そういう人たちの受け皿になると思われるのが「ピア・ツー・ピア」(P2P)のビジネスモデルだ。これは、個人の間で、情報を交換しあうのは、友だち同士でCDやテープのコピーを認めるのと同じで、著作権の侵害にあたらないとの原則を利用して、パソコン同士がインターネットでファイルを交換し合えるようなソフトを広げるようという動きだ。昨年あたりは、Gnutellaというソフトが話題になっていたが、最近では、iMesh、Aimster、FreeNetといったものが注目されている。

最近のワシントン・ポスト紙(2月25日)も1面で、Aimster(エイムスター)ととりあげ、「ナップスターよさようなら」(タイム誌)というインターネット界隈の雰囲気を与えている。ナップスターが著作権の侵害だとされたのは、ナップスター自らがサイトを持ち、そのサイトがどのユーザーがどんな音楽ソフトを持っているかという情報交換の場になっていたが、エイムスターは情報交換ができるソフトを提供するだけで、どんなソフトが交換されているかには関与していない、というのだ。

実際にこれらのソフトを使ってみると、機能的にはナップスターと同じで、本当に著作権侵害のハードルを超えることができるのだろうか、という気がする。ただ、明らかにナップスターよりも進化していると思うのは、音楽ファイルにかぎらず、画像ファイルなども交換し合えるようになっていることで、こうした「次世代ソフト」のめざすところは、ブロードバンド時代を見据えて、ビデオなどの情報交換ではないかと思う。

ナップスターが大手ビジネスに取り込まれていくなかで、そのゲリラ精神を受け継いだ新手法のソフトがつぎつぎに出てきているわけだ。このエイムスターのユーザーはすでに250万人だそうなので、6400万といわれるナップスターにははるかに及ばないが、その普及の速さは、驚くほ

どだ。ナップスターの「被害者」はレコード業界だったが、これからは、ビデオ会社、出版会社などからも「被害者」が広がる時代になるだろう。

ナップスターの成熟と喪失は、インターネットの爛熟期の到来を告げるものになりそうだ。  
(2001/2/27)